

さくらじょうあと 佐倉城跡(歴博第10次)

－佐倉聯隊営所の裏側－

上席調査研究員 日暮冬樹

遺跡の概要

佐倉城跡は、鹿島川とその支流高崎川の合流点を臨む細長い標高約 30m の台地に所在する。この台地上では、旧石器時代から近代に至る人々の生活の痕跡が発見されている。特に著名なものは、遺跡名称の由来となっている江戸時代の佐倉城である。この地には、戦国時代に千葉氏一族が築城した鹿島城があったが、慶長 16 年（1611）に佐倉城が土井利勝によって改めて築城され、明治 4 年（1871）の廃城まで江戸東方防備の要、江戸幕府を支える譜代大名の居城として使われていた。

明治時代以降、この地には佐倉城に代わって、陸軍歩兵連隊の営所が置かれた。兵営施設は、明治 7～8 年（1874～75）に設置され、第 2 次世界大戦が終結した昭和 20 年（1945）まで約 70 年間存続した。その後、兵舎は引揚者の寮や佐倉中学校の校舎として使用されるが、昭和 56 年に国立歴史民俗博物館が開設され、旧陸軍関係の建物は姿を消した。

歴博第 10 次調査

今回の発掘調査は、国立歴史民俗博物館共同研究棟の建設に伴い行われた。平成 24 年 12 月 25 日から平成 25 年 3 月 22 日まで、調査面積 1,125㎡の発掘が実施された。今回の調査では、原始古代・近世・近代の 3 期にわたる遺構・遺物が発見された。現在の地表面から古代の遺構面まで、6～7m を掘り下げることになり、大規模な埋め立て整地作業が行われていることが窺えた。原始古代の層では、弥生時代の集落跡と思われる竪穴住居跡 1 軒などが検出された。近世では、3 期の遺構面が検出され、武家屋敷の通路や植栽跡が確認された。そして、近代の遺構面では、旧日本陸軍の営所跡が確認され、特に注

目を集めた。

発掘調査地点は、営所の施設配置図から、連隊本部棟と洗面所・^{かわや}廁が存在していたことが分かる。「佐倉兵営及び旅団本部之図」（1889 年）には、連隊本部棟の大きな建物と洗面所・廁と思われる小さな建物 2 棟が描かれている。この明治初めの兵舎は、白壁・洋瓦葺・コーナーストーン張りの建物であった。佐倉の連隊本部棟（明治 9 年建築 『佐倉市史卷三』）は昭和 52 年頃まで建物が残っていたが、その途中建替えがあり、最終的には木造下見板張り 2 階建て、和風瓦葺き寄棟造りの屋根を持つ建物になっていた。

今回の発掘調査で検出された遺構は、雨落ち溝を伴った連隊本部棟、洗面所跡、トイレ遺構、連隊本部棟と洗面所を繋ぐ渡り廊下、^{あんきょうあと}暗渠跡であった。出土した遺物は、陶磁器類・ジェラール瓦・レンガ・銃弾・銭貨・陶製便器・鉄釘・ガラス製品であり、軍事関連の品々以外に文房具や手洗い関係のものが、比較的多く出土した。

連隊本部棟跡と暗渠跡

連隊本部棟跡は、調査区の西端に建物基礎と雨落ち溝が検出された。連隊本部棟は、全長約 50m であるが、その内約 20m 分の基礎が検出された。基礎は、柱が立つ位置に長さ 80cm × 幅 25cm の短冊形の石を 4 枚並べ、壁が立つ位置には不整形の石を敷き詰めていた。さらにその上には、厚さ約 30cm のコンクリートの帯状基礎を敷いていることが分かった。雨落ち溝は長さ 60cm、幅 25cm、厚さ 10cm の長方形の石を 2 枚 V 字形に敷いたものである。ただ、雨落ち溝が V 字状態で残存していたのは、一部分であった。

暗渠跡は、調査区内の台地の縁辺部に沿って、全長 33m にわたって検出された。75cm × 30cm、厚さ 10cm の長方形を呈する底石を並べた両側に側石を 2 段積み上げていた。暗渠跡は、北側より南側の方が遺存状態が良好であった。北側部分の暗渠跡は、洗面所の破壊に伴い、側石が押されて底石の上に乗っていたが、南側は側石が隙間なくしっかり積まれた状態で残されていた。

洗面所とトイレ

洗面所跡は、洗面所が破壊された状態で検出された。その範囲は、北側の調査区域外までに広がっていた。確認できる限りでは、8m × 6m の範囲にコンクリートブロックや石、瓦、レンガなどが散らばっていた。その範囲内の土は固く締まっており、かなり転圧されたように思われる。土の中からは、陶製便器片や銃弾、陶磁器類、銭貨、ジェラール瓦などが出土した。

連隊本部棟と洗面所を繋ぐ渡り廊下跡は、土管とコンクリート造りの暗渠跡にはさまれ、中央部にコンクリート基礎の柱跡 4 基で構成されていた。

トイレと思われる遺構は、2 ヶ所発見された。トイレ遺構 1 は、洗面所同様に破壊されたようにほぼ 5m × 3m の範囲にコンクリートや石、砂利が散乱していた。その中に、長さ 2.4m、幅 1.2m、深さ 1.2m の長方形の掘り込みがあり、汚水の集積枡と推測される。この場所は、営内配置図で「厠」と記されている場所にあたると考えられる。

もうひとつのトイレ遺構 2 は、直径 80cm、深さ 1m20cm の円筒状の土坑が 4 基ずつ 2 列、計 8 基並んでいた。これらは大使用のトイレ跡と推測されるが、出土遺物はほとんどなく、営内配置図にはこの地点に建物の記載がない。周囲に掘立柱建物状のピット配置が見られ、簡単な覆屋であった可能性がある。

これらの洗面所や厠に相当する建物も連隊本部棟とともに昭和 52 年頃まで残されていた。赤い瓦が葺かれ、洗面所は柱しか確認できないが、「厠」建物は外壁が板張りらしきことが確認できる写真が残

されている。

洗面所に関しては、場所まで一致するかどうか不明であるが、当時の兵営の洗面所写真が残されている（案内チラシ等参照）。壁がなく柱だけで屋根を支える覆屋内にコンクリート製の洗い場がある構造を写真から把握することができる。

残念ながらトイレ施設の写真はないが、佐倉城址公園内には、別のトイレ施設遺構が残されている。この国立歴史民俗博物館の休憩広場に残された遺構は、コンクリートによって土台が造られており、今回検出された遺構とは少し趣が異なっている。

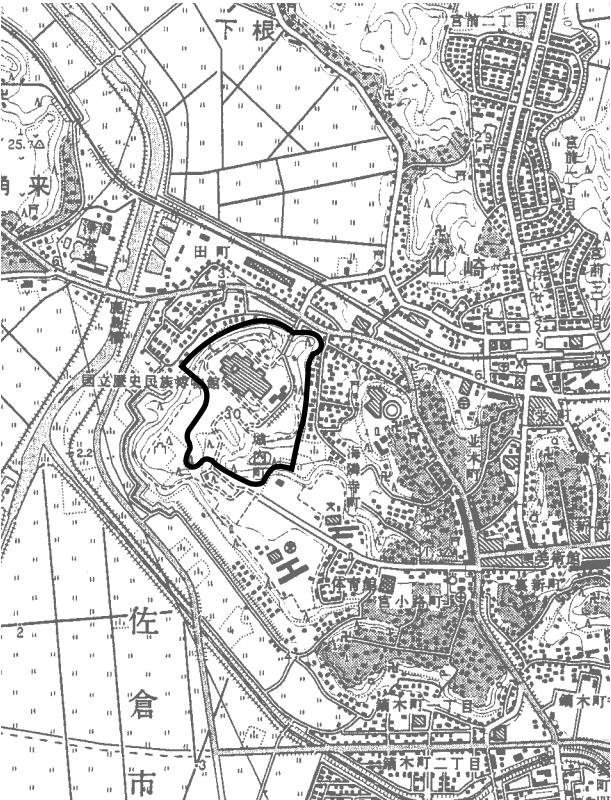
地域と連隊

昔の農作業では、干鰯^{ほしか}・油粕類と共に人糞や馬糞が、肥料として使用されていた。そのため、多勢の人や馬が集まった佐倉連隊から出る多量の糞尿は、貴重なものとして取引されていた。

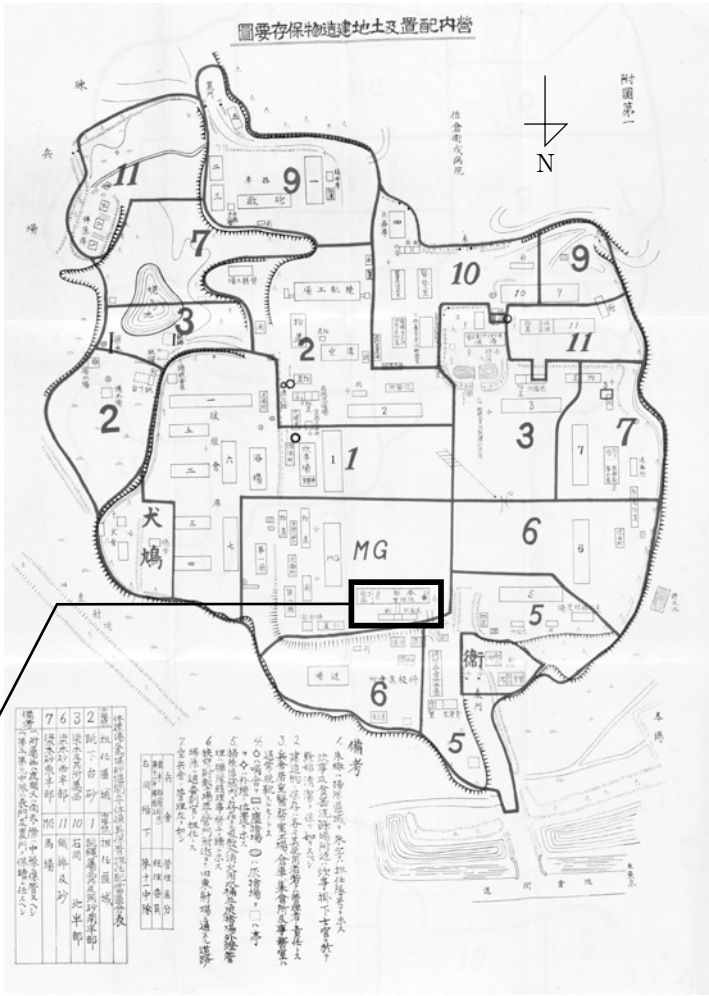
昭和 2 年度と同 3 年度に根郷村（現佐倉市）が佐倉連隊から下肥^{しもこえ}の払い下げを受ける契約書が残されている。根郷村は肥料組合を作り、連隊本部・大隊本部・第一大隊・休養室（昭和 2 年度のみ）・医務室（昭和 3 年度のみ）・兵器庫・弾薬^{つめかえしよ}填替所^{そくとう}・唧筒（ポンプ）置場のトイレから出る人糞を受け取り、昭和 2 年度と昭和 3 年度上半期には 1 月あたり 470 名分として 11 円 75 銭（1 人あたり 2 銭 5 厘）、昭和 3 年度下半期には 1 月あたり 380 名分として 9 円 50 銭を支払い、営所の掃除や消毒の請負も人糞の代償に行っていた。今回発掘されたトイレ遺構の人糞も、払い下げられていたと思われる。軍事的意味合いから離れた日常生活のレベルで、佐倉連隊と地域の繋がりは少なからずあったのである。

今回の調査は、陸軍営所のごく一部を明らかにしたに過ぎないが、今後整理作業が進展するにつれて、いろいろな事がわかってくると思われる。

佐倉営所の位置と発掘調査地点

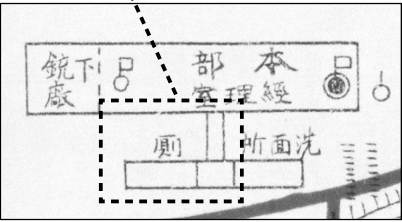


佐倉営所位置図 (S = 1 : 25,000)

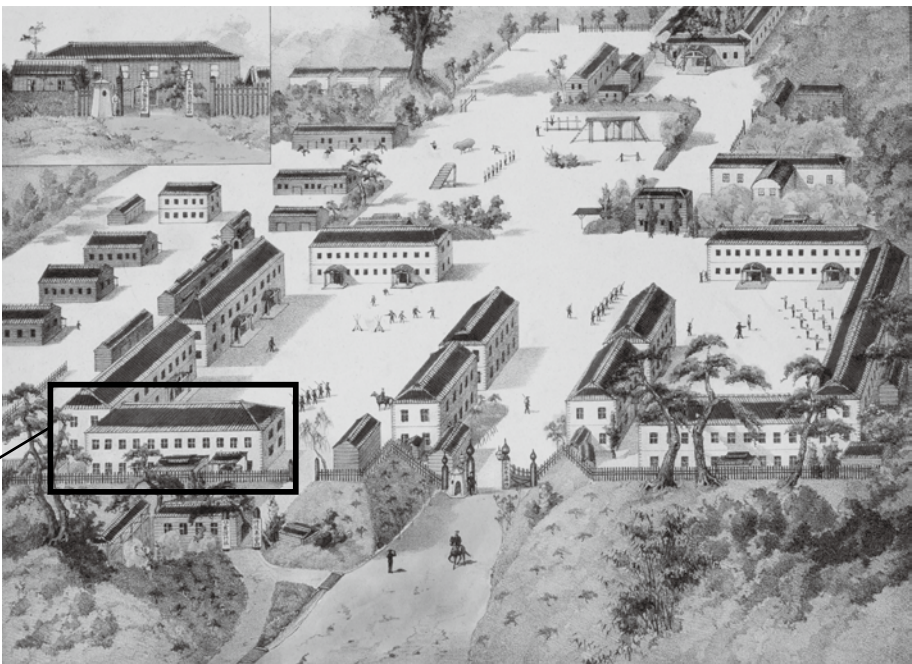


1934 年発行 『連隊内務規定』所収 営内配置及土地建造物保存要図 (国立歴史民俗博物館蔵)

発掘調査区範囲



図中の点線で囲った部分が発掘調査地点です。長方形の大きな建物が連隊本部棟、その手前の小さな2棟の建物が洗面所と厠と推測されます。



1889 年発行 佐倉営舎及び旅団本部之図 (国立歴史民俗博物館蔵)



佐倉城跡（歴博第10次）近代面全景（南から）



「近歩四」記載出土德利



「明治十六年六月 第一大隊第一中隊第三小隊第六分隊鈴木三之介」刻出土碇